

## 論文の内容の要旨

論文題目 台湾プロレタリア文学の誕生～楊逵と「大日本帝国」～

氏名 張季琳

日本統治期の台湾文学においては台湾人日本語作家が大きな役割を果たしているが、彼らの中で最も重要な作家の一人が本論文でとり上げる楊逵（本名楊貴、1905-85）である。彼は1930年代プロレタリア作家として活躍し、当時の日本の中央文壇にも登場した。本論文は楊逵（本名楊貴、1905-85）の生涯と文学に関わる諸問題の中から、彼の一九三〇年代における文芸活動及び彼と日本知識人との交流の二つを主題として選び、現存文献資料や関係者の証言、書簡などに基づいて調査考察し、その結果をまとめたものである。本論文は全九章及び付録からなっている。

第一章では、台湾文学史上における楊逵の位置付けを試みた後、従来の楊逵研究を概観する。

第二章では、楊逵の略年譜を挙げながら、彼の生涯を通覧し、彼の経歴を九期に区分する。

第三章では、楊逵の公学校の恩師沼川定雄の生涯と台湾における経歴を概観し、彼の台湾観を吟味し、彼が楊逵の人生と文学に及ぼした影響について考察する。楊逵をして文学に開眼せしめ、彼の文学活動に一定の方向を与えたというところに、楊逵と沼川定雄の交流の最大の意義がある。

1932年楊逵の執筆した出世作「新聞配達夫」は、1934年に改造社『文學

評論』賞を受賞し、それによって楊逵は日本の中央文壇に登場した最初の台湾人日本語作家となる。第四章では、楊逵のこの受賞の経緯を辿り、当時のプロレタリア作家らの楊逵への評価を吟味する。「新聞配達夫」は台湾人の真情を伝える佳作であるが、芸術的には未熟である、というのが大方の日本人作家の評価であった。ともあれ、この受賞により楊逵は朝鮮を代表する張赫宙と並んで台湾を代表する植民地作家の地位を獲得する。

楊逵は1935年暮臺灣新文學社を興し、37年6月まで文芸誌『臺灣新文學』を主宰する。第五章前半では、この雑誌編集をめぐる楊逵の苦心の跡を辿り、彼が『臺灣新文學』誌上に試みたさまざまな新企画や新機軸がいかなるものであったかを確認する。同章後半では、楊逵と日本文壇の交流の実態と意義および1937年夏の楊逵の東京再遊の経過を解明する。

第六章では、左翼系の新文学運動に携っていた頃の楊逵の文学観を吟味する。当時の彼の文学観とは、「芸術は大衆のものである」の一言につきるが、これはトルストイの芸術論に由来するものである。

第七章では、1937年楊逵の新文学運動の挫折の諸原因を解明する。挫折の外的要因はプロレタリア文学の衰退、日華事変勃発、台湾の文学的土壌の未成熟であり、内的要因は楊逵の文学観の限界性による行き詰まりである。

1937年末、日本人警察官入田春彦の援助により、楊逵は窮地を脱することを得る。第八章では、入田春彦の経歴と文学、彼の自殺までの経緯、入田春彦と楊逵の交友の意義について考察する。この交友の最大の意義は、入田春彦の遺贈した改造社版『大魯迅全集』により、楊逵が魯迅文学を本格的に受容しえたということにある。

第九章では、本論文で論じた楊逵の新文学運動と彼の日本知識人との交流の意義を確認し、本論文の成果が今後の楊逵研究にいかなる展望をもたらすかを検討する。

巻末に付録として台湾・中国における楊逵研究論考一覧表などを収める。